2016年、越喜来で上がった花火。圭さんが実行委員長となり、2011年から毎年花火大会を続けている。

2011年8月11日夜7時、岩手県大船渡市越喜来（おきらい）。一本の閃光が空を走り、パッと白菊の大輪が咲いた。その強烈な光が、まだ残る瓦礫の山や心許ない仮設住宅の壁を照らし出した。光は砕け、爆発音が響く。無邪気に笑う子ども、泣く人、見とれる人……2千発の花火が浮かび上がらせた表情はさまざまだった。テーマは「鎮魂と追悼」だったが、花火がメッセージを持っているのではない。見る人が決めることだと思った。「やってよかった」と、中野圭さんは胸をなで下ろした。

東日本大震災

2011年3月11日午後2時46分、父・中野勇喜さんは海にいた。船がガタガタと揺れた。エンジンの故障かと思ったが異常はない。スクリューの故障を疑ったがこちらにも異常はなかった。そこで初めて水面に目をやった。水面が揺れ、互いにぶつかり、細かな水滴がポツポ

「中野えびす丸」十六代目船長・中野圭さん（35）。

ツと上がっていた。「これはなんだ」。ふと顔を上げると、山という山からもうもうと煙が上がっている。崖崩れのように見えたが違う。スギの木が一斉に揺さぶられ、揺り落とされた花粉が舞い上がっていたのだ。「これは大変な大地震だ！」急いで港まで船を走らせる。海の上で地震を感じたのはこれが初めてだった。ほんの2、3分で港に着いたが、岸壁にロープをかけ、陸に上がろうとするとものすごい勢いで水面が下がっていった。津波の前兆である引き潮だった。かろうじて岸壁にかかったハシゴをつかんでよじ登り、一目散に高台に逃げた。「津波だ、津波が来る」。水深5m以上はある港の水が空っぽになるまで潮が引いた。そして地震発生から30分後、11mの津波が押し寄せた。それは4mの防潮堤を軽々と超え、濁流は集落の中心部を飲み込んだ。

一方その頃、圭さんは新宿のアパートにいた。激しい揺れに飛び上がり、すぐにアルバイト先のホテルに向かった。帰宅困難者を受け入れ、毛布を配り食事を提供した。夜になり、携帯電話に飛び込んできたニュース速報に釘付けになった。「仙台市若林区、2百名の遺体を発見」。若林区には姉が住んでいた。姉ちゃんは無事なのか、2百名ってことは実際にはもっと多いはずだ、岩手の両親は無事なのか……。アルバイトを終え帰宅して初めて、テレビに映る津波の映像を見た。もちろん電話はつながらない。家族の安否を確認するには行くしかない。翌日、同郷の友達7人でレンタカーを借りて被災地に向かった。高速道路は不通なので下道を行く。どこもかしこも通行止めだらけだった。やっとの思いで隣町の陸前高田市に入ると、変わり果てた風景に絶句した。大きな橋が落ち、見慣れた町が無くなっていた。車内はすすり泣きでいっぱいになった。実家に到着したのは出発から3日後だった。高台の家は流されることなくそこにあり、中には両親がいた。途中で連絡がついた姉の無事